

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01027

研究課題名(和文) イギリス型チャリティのトランスナショナルな伝播に関する研究 1870-1950年

研究課題名(英文) Research on the transnational transfers of British charities, 1870-1950

研究代表者

金澤 周作 (Kanazawa, Shusaku)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70337757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究がケーススタディとして取り上げたのは、イギリス人姉妹エグランタイン・ジェブとドロシー・バクストンによって、ロンドンで1919年に設立された、旧敵国の子どもたちを救うためのセーブ・ザ・チルドレン基金(SCF)と、彼女たちの主導で翌年ジュネーブに置かれたトランスナショナルなアンブレラ組織、国際セーブ・ザ・チルドレン連盟(UISE)の活動である。人道支援におけるイギリスおよびヨーロッパの相対的失速とアメリカ合衆国の急激な台頭という文脈のなかに位置づける形で、本研究は両団体が直面した諸課題と、救済の与え手と受け手の双方にアプローチするさまざまな工夫を究明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの救済という大義は現在、広く受け入れられているが、その内実を歴史的に検討すると、必ずしも相いれない二つの潮流が異趣同舟的に合流していることが分かった。一方では自国の人口的・経済的・軍事的な意味での将来を担う世代の育成というナショナリスティックでしばしば排他的、国同士で競合するような目的。そして、もう一方では、(SCFやUISEが目指したように)国・宗教・階級に関わりなく、敵見方の区別もなく、人類全体の将来世代の保護・育成をすべし、というトランスナショナルで包含的な目的。この視角は、国内外の子どもの多種多様な窮状を前に、国際社会、国、地方、民間がとるべき優先順位を考える助けとなるだろう。

研究成果の概要(英文)：Special attention is given to the Save the Children Fund (London), founded by British sisters, Eglantyne Jebb and Dorothy Buxton in 1919, immediately after the armistice of the First World War, to help the children of former enemy countries, and its transnational umbrella organisation UISE (Geneva) in 1920. Against the background of Britain's (and Europe's) relative decline and the spectacular rise of the USA in the field of humanitarian activities, this research has identified the major challenges faced by the SCF and the UISE and their astute strategies for reaching both those in need and those who wanted to help.

研究分野：イギリス近現代史

キーワード：イギリス近現代史 国際人道支援 チャリティ セーブ・ザ・チルドレン 第一次世界大戦 第二次世界大戦

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで長年にわたり、イギリス近代におけるチャリティが持つ意味を、さまざまな事例研究を通じて検討してきた。その際、重視したのはイギリスにおける「福祉の複合体」――自助、互助、チャリティ、公的救済から成るセーフティネットの四重の網――の中で、チャリティの相対的な役割を見極めることであった。そのため、チャリティとして総称される実践を形式別に分類し、それぞれの規模を推計し、都市・農村における分布を概観できるようにして、同時代の自助、互助および公的救済の実態の文脈の中に落とし込んでその有機的な位置づけを試みてきた。1840年代後半の 아일랜드 大飢饉の折にブリテン島内外で盛り上がった救済熱や、第一次世界大戦において未曾有の規模で展開した「戦争チャリティ」、さらに本国の外側の「帝国」における、宣教師などを介した諸種の教育・医療のチャリティについても調査をしてきた。これらは総じて、「イギリス史」研究の動向にも沿っていたのであるが、ひとつ大きな盲点があることに気づかされた。それが、イギリス本国/帝国を考察の前提とするため、この枠組みを超えた領域において、イギリス由来のチャリティがどのような役割を果たしていたかに関心が向かないという問題である。

21世紀前半の現在、人道支援のための国際 NGO が世界中で数多く活動しているが、実はイギリス起源のものが少なくない。しかし、従来のチャリティ史研究において、国際 NGO に注目したものは乏しい。別の言い方をすれば、国際 NGO は国際関係研究においては注目されているが、歴史学的に検討される例はほとんどないのである。それゆえ、近年重視されているトランスナショナル・ヒストリーの視角を援用すれば、イギリス近現代史およびイギリスのチャリティ史に新しい研究分野が開かれることが予想された。

2. 研究の目的

帝国主義と二つの世界大戦を含む激動の近現代史の時期（1870年から1950年）を対象にして、この間イギリスから発生したいくつかのトランスナショナルなチャリティのムーブメントを取り上げて、その詳細を明らかにするとともに、それらを通じて、イギリス型といつてよいチャリティの組織や活動内容が、トランスナショナルに伝播する脈絡を究明することを目的にした。

3. 研究の方法

具体的には、チャリティ団体の過剰と貧者の増長を問題視して1869年にロンドンで誕生したチャリティ組織化協会と、第一次世界大戦の休戦後の1919年に旧敵国の子どもを上から救うべく同じくロンドンで設立されたセーブ・ザ・チルドレン基金に焦点を合わせることにした。それぞれの、本国および伝播先での活動を踏まえ、それらをつなぐネットワークの形成プロセスを再構成していく計画を立てた。先行研究で概要を把握したうえで、史料調査を行い、方針決定の現場に潜っていこうとした。方法論としてはオーソドックスな歴史学研究のそれを出ないが、トランスナショナル・ヒストリーの視角を採用することで、イギリス史としての遂行が無意識的に再帰的に「国史」を強化してしまう、いわゆる「方法論的ナショナリズム」の磁場からの離脱をできるだけ図るといったものである。

4. 研究成果

研究期間2018年度～2023年度のうち、2020年度から数年にわたるコロナ禍により、当初の海外調査が不可能になった。そのため、チャリティ組織化運動の国際的な伝播については先行研究から概要をつかみ、いくつかの刊行史料を分析するにとどまった。それでも、アメリカ合衆国のいくつかの都市における事例を読み、また、Gilman, D.C.(ed.) (1894), *The Organization of Charities: Being a Report of the Sixth Section of the International Congress of Charities, Corrections, and Philanthropy, Chicago, June, 1893, Baltimore*のようなトランスナショナルな学びあいの実践共有の報告を検討することを通じて、あらためて、チャリティの組織化運動、すなわち公的福祉とチャリティ諸団体の「科学的」連携による社会問題を解決すべしという思潮が、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、すくなくとも欧米世界では一種の流行、ないし通奏低音をなしていたことが確認できた（同時代の日本でも1908年に「中央慈善協会」が設立されたが、内務省が対外的に発信した際のこの英語表記は Charity Organization Societyであった）。

研究対象を、次第にセーブ・ザ・チルドレン基金とその周辺に絞っていった。とはいえ、トランスナショナルな側面を組み込んだイギリス・チャリティ史の構築の作業は、『チャリティの帝国――もうひとつのイギリス近現代史』（岩波新書、2021年）において、見取り図を提出するところまでは進めることができた。同書では、イギリスの国内史、帝国史、国際関係史という、そ

れぞれに追究されてきたものを撚り合わせて、チャリティの近現代史を組み立てた。その中で、先述のチャリティ組織化運動のトランスナショナルな伝播、および後述のセーブ・ザ・チルドレン運動の拡大についても、それなりの紙幅を割いてその一端を書き込むことができた。この見取り図は、おそらく本邦初の内容で、自分の今後の研究の方向性をも規定するものである。

本研究において、結局、専一的に焦点を合わせるようになったセーブ・ザ・チルドレンについては、その初期史を、歴史学研究会大会の全体会（2021年5月29日）において、「トランスナショナル・フィランソロピーと救うべき子ども セーブ・ザ・チルドレンの初期史から」と題して報告し（詳しい要旨は『歴史学研究』1015号、2021年10月）で報告した。また、両大戦間期から第二次大戦後の推移を、直前の海外調査の成果を用い、京都大学人文科学研究所の研究班「人物で見る第二次世界大戦」の第7回例会（2023年3月18日）にて「国際人道支援と第二次世界大戦 セーブ・ザ・チルドレンをめぐる人々」として報告した。

上記の人文科学研究所での報告の前（2023年3月）と、2024年3月の二度にわたり、現地調査を行った。バーミンガム大学のカドベリ図書館とロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの「女性図書館」に所蔵されている、イギリスのセーブ・ザ・チルドレン基金（SCF）およびこれが主導してできたジュネーヴの国際セーブ・ザ・チルドレン連盟（UISE）に関わる諸文書（機関誌、小冊子、書簡など）を幅広く調査した。創設者の姉妹（エグランタイン・ジェブ、ドロシー・バクストン）のみならず、彼女たちを裏方として支えたイギリス内外の人びと、そして組織としての活動実態について、新たな知見を得ることができた。たとえば、機関誌『世界の子どもたち』を精査すると、次のようなことが分かった。セーブ・ザ・チルドレン基金は、第一次世界大戦後に設立され、数年間は爆発的な人気を誇り、莫大な募金額を達成していたが、年次報告書から年収入額の推移を再構成してみると、急速に支持にかげりをみせている。この傾向は第二次世界大戦中も続いたのだが、同団体は実際にはできなくなった国際的な活動を補うかのように、機関誌において国際ニュースに傾注し、国際NGOとしての体裁を維持し続けた。簡単な経年トレンドは次の通りである。

- ・ 1937年 この年までは記事数が多い（分厚い）、アフリカ、中国、スペイン、ハンガリー、ドイツの非アーリア人、ドイツからの難民・・・
- ・ 1938年 ユーゴスラヴィア、中国、スペイン、ハンガリー、アフリカ、南ア、アビシニア（エチオピア）、オーストリア、チェコスロヴァキア、ドイツの非アーリア人、ドイツからの難民
- ・ 1939年 チェコ、南ア、ジャマイカ、ハンガリー、アビシニア（エチオピア）、保育所、カナダからの支援、中国、スペイン、ユーゴスラヴィア
- ・ 1940年 ポーランド、ジャマイカ、アルメニア、ギリシア、アビシニア（エチオピア）、疎開
- ・ 1941年 アビシニア（エチオピア）、疎開、遠隔養子制度、アメリカからの支援・来客、保育所（各地の活動報告、開所報告）、帝国からの支援、レバノン
- ・ 1942年 帝国からの支援、保育所、アフリカへのSCF宣伝、UISE報告、中国戦争孤児、アメリカからの支援、ユーゴの英 ユーゴ小児病院の「思い出」、占領下の子ども、オーストリア
- ・ 1943年 子ども権利宣言20周年、ジャマイカ、カナダからの支援、中国、保育所、ジュニア・クラブ、アメリカから来客・支援、占領下の子ども、カナダ・NZの活動、UISE、全国子ども福祉会議、国際子ども福祉、ラテンアメリカ、ロシア
- ・ 1944年 UNRRA、UISEの各国状況報告、西アフリカ、カルカッタ、欧のDP（ディスプレイスト・パーソンズ；ホームに返し家族と再会させる原則）、中東、ポルトガル、未来の主婦、ユーゴスラヴィア、メキシコ、子どもと家族、スウェーデン、フランス、ナイジェリア、エジプト、エチオピア、ヨーロッパ救済、ハンガリー、ポーランド、子どもとホーム、ロシア、ガンビア、チェコスロヴァキア、少年非行、心の病、有色人（混血児）、ジャマイカ、パレスチナ移民、
- ・ 1945年 ポーランド、ゴールドコースト、エジプト、ソ連、オランダ、フランス、ユーゴスラヴィア、アメリカ（移民）、ユダヤ人、中国、ナイジェリア、ビルマ、エジプト、マラヤ、モンテネグロ、ギリシア、家族、ドイツ、ジャマイカ

このような活動を支えたのは、裏方の人びとであった。とりわけ二度の海外調査で重要性が浮かび上がってきたのが、創設直後から参加し、1950年代まで30年以上にわたり同団体の広報を統括し機関誌の編集を担ってきたエドワード・フラーであった。フラーは広い視野を持ち、団体の収入増加に意を用いた。たとえば1923年、当時の会長ウェアデイル卿の死去に際して、寡婦との心のこもった書簡のやり取りをしているが、その際、伝記の出版や、スイスのジュネーヴ（UISEの本部がある都市）に「ウェアデイル通り」を作ることを真剣に検討して問い合わせをしている（いずれも実現せず）。その態度がおそらく功を奏し、ウェアデイル卿の寡婦や子どもたちは以後も同団体を支援した。1929年にカリスマ的な創設者であったエグランタイン・ジェブが亡くなると、追悼特集を何度も組むだけでなく、本や小冊子を次々に刊行して彼女の「聖人」化を進めた。1945年にはBBCのラジオ番組で流す創設者エグランタイン・ジェブ伝の脚本を担当している。1951年には公式的な団体史『子どもの権利』を出版したが、ここでは、創設者姉妹の

他、現場で活躍した女性ワーカーたちに事績に多くの紙幅を割いた。また、フラーは自身、子ども福祉の専門家であった。1929年の機関誌には、あるクリニックでの非行少年少女の更生のための懲罰的ではない新しいやり方（非行の原因を適応障害とみなす）を論評した。戦後には、名誉博士号も授与されている。もちろん、彼の他にも、長年にわたり組織を内側で支えた注目すべき人物が数人おり、さらにイギリス外部のさまざまなフィールドで子ども救済に従事する（主として女性の）ワーカーたちについても、ある程度の人物像が見えてきた。従来、国際NGO史は組織としての集合的な活動内容に光が当てられる傾向があるが、本研究では、より微視的に組織を構成する個々人へ迫ることができた。

機関誌その他のセーブ・ザ・チルドレン関連の文書からは、イギリスのチャリティ史ないし国際NGO史における重要な潮目の変化が見えてきた。20世紀の前半のうちに、それまで人道支援の分野でもヘゲモニーを握っていたイギリスのプレゼンスが下がり、代わってアメリカ合衆国が劇的に台頭してくるのである。象徴的には、1942年にイギリス政府は終戦後のヨーロッパへの官民救済を計画し配分するための組織、イギリス海外支援団体協議会（COBSRA）を設置した。対して、アメリカは1943年に連合国救済復興局（UNRRA）を設置した。これは、連合国の47か国で組織されるもので、侵略を受けなかった国が国民所得の2%を拠出する計画で、37億ドルのうち、26億ドルを米政府が負担、さらにアメリカの民間から2.1億ドルを拠出したところからわかるように、金額の点でも関係する国の多さからしても、圧倒的であった（実際にCOBSRAは大した活躍ができなかった）。確かに、イギリスのSCFは大戦中、アメリカのセーブ・ザ・チルドレンを中心とする資金援助でやっと活動を続けられる状態であり、この例からも推察されるのだが、おそらく、イギリスは国として史上はじめて、チャリティの受け手になった。大戦後、SCFはふたたび国外の子ども支援に邁進するが、このときのイギリスは国際社会においてアメリカの後塵を拝する地位に変わっていた。その中で、SCFは、自らのプレゼンスを内外にアピールして存続をはかり、脱植民地化の激動の時期を越えて、現在も世界を代表する子ども支援の国際NGOとして活動している。そして、イギリスではじまったセーブ・ザ・チルドレンの運動は、世界中に各国団体を持ち、ゆるやかに連携している。このように、イギリス・チャリティはトランスナショナルに伝播し、もはやイギリスが世界の覇者ではなくなった世界に定着したのである。

期間中に本格的な成果として出すことができなかったが、イギリス・チャリティをトランスナショナルな観点から見直す作業は、いくつかの派生的な成果を生んだ。ひとつには、日本史の研究者からの要請により、日本の「慈善」との比較や関係の視座からの研究交流を行った（「コメント「生きること」と「福祉の複合体」 早田報告と町田報告に寄せて」『人民の歴史学』233号、2022年10月、および、「慈善と救済」の歴史における「比較と関係」の視座 応答」『三田学会雑誌』115巻2号、2022年7月）。もう一つ、「福祉」のありかたを西洋中心的な進歩史（「福祉国家」をゴールにした福祉制度発達史）でも各国史別でもない形で世界史的に概観することを目指して準備中の共編著（正式に出版社とともに現在進行中）においても、いくつかの章やコラムを担当している（セーブ・ザ・チルドレン運動に関するコラムも）。この企画の構想自体、本課題に取り組みの中で具体化した。SCFと第二次世界大戦に関する著書も計画中である。

総括するなら、本研究は、1870年以來のイギリスでのチャリティの諸経験を土台に、第一次世界大戦の惨禍に対処すべく戦後すぐに設立されたSCFと、そのアンブレラ組織として1920年にジュネーブに設立されたUISEが、トランスナショナルな舞台上、戦間期から第二次世界大戦期に直面した諸課題と、救済の与え手と受け手の双方にアプローチするさまざまな工夫に、新たな光を当てることができた。

これにより、子ども救済という、一方で伝統的にひじょうにナショナルに扱われてきた課題が、セーブ・ザ・チルドレンの運動によって、国の違いを超えた普遍的な課題として再編された上、両者がどちらかに統合されることなく異域同舟的に結合するという、歴史的にみてユニークなダイナミズムを浮かび上がらせることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金澤周作	4. 巻 115巻2号
2. 論文標題 「慈善と救済」の歴史における「比較と関係」の視座 応答	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三田学会雑誌	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金澤周作	4. 巻 767・768
2. 論文標題 【書評】山本卓著『二〇世紀転換期イギリスの福祉再編』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 122-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金澤周作	4. 巻 1015
2. 論文標題 トランスナショナル・フィランソロピーと救うべき子ども セーブ・ザ・チルドレンの初期史から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小関隆、金澤周作	4. 巻 9
2. 論文標題 新書における歴史叙述をめぐって 小関隆著『イギリス1960年代 ビートルズからサッチャーへ』（中公新書、2021年）、金澤周作著『チャリティの帝国 もうひとつのイギリス近現代史』（岩波新書、2021年）を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6. 最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50827/jwhn.9.0_46	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤周作	4. 巻 81
2. 論文標題 【書評】大石和欣著『家のイングランド 変貌する社会と建築物の詩学』（名古屋大学出版会、二〇一九年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 141 149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00020445	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金澤周作	4. 巻 1149
2. 論文標題 総説 複眼的時代区分論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤周作	4. 巻 76
2. 論文標題 チャリティとラスキン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ラスキン文庫たより	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金澤周作
2. 発表標題 国際人道支援と第二次世界大戦 セーブ・ザ・チルドレンをめぐる人々
3. 学会等名 人文科学研究所「人物で見る第二次世界大戦」第7回
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金澤周作
2. 発表標題 コメント：「生きること」と福祉の複合体
3. 学会等名 東京歴科研第 56 回大会 「生きること」の困難とその「救済」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金澤周作
2. 発表標題 トランスナショナル・フィランソロピーと救うべき子ども セーブ・ザ・チルドレンの初期史から
3. 学会等名 2021年度歴史学研究会大会 全体会 戦争・身体・国家（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shusaku Kanazawa
2. 発表標題 British and Japanese Charities Historically Compared
3. 学会等名 The Daiwa Anglo-Japanese Foundation Seminar Series 2021（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金澤周作
2. 発表標題 チャリティとラスキン
3. 学会等名 春のラスキン研究講座
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金澤周作	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 チャリティの帝国 もうひとつのイギリス近現代史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本寄付財団が運営するウェブサイトAcademic Research on Donationsの依頼で、「チャリティが「ふつう」である社会の歴史的な厚み」を寄稿した (https://nippon-donation.org/papers/1603/)。
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------